

## 南方（その他）

予備士官学校在校中南方へ

戦後処理将校二年間

静岡県 酒井清次

私は昭和十八年十一月二十九日、入宮のため、我が家を出発し、兵庫縣篠山の歩兵第百連隊へ向け出発した。転属先は第三十八師団（沼兵団）で、ガダルカナル島へ派遣されることになっていた。初年兵教育は日夜厳しく行われたが、特に私は甲種幹部候補生合格を目指し深夜まで勉強した。一月十七日、ラツパ手を先頭に堂々宮門を出て、ガダルカナル島への征途についた。

ところが、大阪港で乗船命令が出た翌日、幹部候補生合格発表があり、合格者以外の者は、ガ島へ出航し、後に台湾沖で撃沈され、ほとんど戦死されたという。

我々は仙台予備士官学校入校、第一線小隊長としての教育を受けていた。九月一日突如として、一部の者を除き、生徒全員は南方軍転属の命令が出て現地教育ということとなった。出征の服装は夏服で、ラツパの吹奏と共に完全軍装で校門を出た。私は「父、危篤」の電報を受けていたが、仙台へ来た弟と妹の見送りを受けて征途についた。

輸送列車が故障、藤枝駅通過の折、父を看病中の母あてに次のような手紙を、石に包んでホームに投げた（その書は後に母に届けられた）。

「父上危篤の報を頂いたのにお目にかかれず申し訳

ありません。南方戦線に向かいます。全力を尽くして戦います。さようなら。母上よろしくお願いします。清」

父は一時小康状態を保ったが、半年後亡くなったと  
のことであった。

九月十九日午後、博多駅着。二十四日、乗船命令が下った。青葉隊、広瀬隊、名取隊、宮城隊と順次乗り込む。船は「第十五多聞丸」という新造船で、標準船六千五百トンくらいと記憶している。我々と同乗する船舶挺身隊の少年兵が上等兵の襟章を付けて乗り込んできた。船には、青く塗られたベニヤ板作りのモーターボートが大量に積み込まれた。船倉にはこれに装備される魚雷が格納されており、少年兵はまだ十八歳未満の志願兵であった。

戦闘のときは魚雷を装備したモーターボートを操縦、自己の生命を犠牲にして敵艦艇に体当たりして撃沈する任務を課せられている。今思えば「震洋Ⅱ水上特別攻撃隊」であろう。任務が成功し戦死の場合には二階級特進し、靖国神社へ合祀されると、彼らは胸を張っ

ていた。

博多港は最後の大船団、それぞれ南方へ向かう兵士を乗せ夕刻出港していった。翌朝は天気晴朗であった。一緒に出発したはずの船団が一隻も見当たらない。船員に聞くと、「第十五多聞丸」はスクリューが破損して速度が四ノットしか出ないとのこと。快速船団の僚船は昨夜中に我が船を残して先行していった。敵潜水艦の出没する東支那海で、四ノットしか出ない単船では、いつ攻撃されるか分からない。護衛艦もついてくれな  
いし、いつ海中に飛び込むか分からないということであつた。

ところが、この欠陥船が敵の攻撃から逃れ得た。不思議にも先行三〇余隻はほとんど撃沈されたという。十月に入ってようやく台湾へさしかかったとき、強力な敵機動部隊が南支那海に集結との情報が入り、「多聞丸」はこれを避け台湾の高雄港に入港し、乗員を上陸させて、船は香港へ避難した。そのとき、台湾沖海戦が開始された。これは我々が初めて出会った戦である。キーンという金属性の爆音が遠くでしたと思うと、

米粒ほどの機影がたちまち頭上にきて爆弾を投下する。立ち去ったかと思うと、次の編隊がやってきて機銃掃射をする。日本軍も高射砲部隊が盛んに応戦するが、射程距離がB29には届かず一発も命中しない。

私たちは高雄市港小学校に宿営していたが、機銃の掃射を受け、五十キロ爆弾が近くの民家へ命中し、民家は破壊、小学校も講堂の屋根が一部吹き飛んでしまった。民間人はすべて防空壕へ退避して死傷者はなかったが、私たちは強烈な爆風を受け、ヒヤッとした。

十一月末になり、候補生の中から百名フィリピンへ上陸するとの命令があり、広瀬隊が選ばれた。危険海域であるから、無事上陸するようにと、我々は送別会を催して武運を祈った。翌朝、広瀬隊の中から選抜候補生は武装して出発。我々は整列をして声を出して送った。数日後、ルソン島への上陸成功の無電が入り、一同歓声をあげて喜び合った。しかし、彼らは上陸直後、第一戦で戦闘を行い辛酸をなめ、任官もしないままほとんどが壮烈な戦死を遂げている。誠に悲しい別れであり、運命の岐路であった。

十二月八日、「多聞丸」に再乗船である。夜を待つて、嵐をついて出港。二日目の夜も嵐で数メートルの高波。この夜、敵潜水艦に発見され攻撃を受けた。船内に甲高い声で「敵襲」の警報が響き渡る。私たちは緊張して甲板に集まる。遅速の船はジグザグ進航路中、魚雷の攻撃を受けたが、魚雷は船の前方を通り抜けていった。二回とも波頭を立てて通り過ぎて行った。余りの遅速で魚雷が当たらなかったであろう。船は海南島榆林港の奥に停泊した。

その後船が動かない。船でアメルバ赤痢患者が続出したのである。そのため「病院船」となり出航ができない。その間、候補生は皆裸になって、シラミ取りに余念がなかった。

一月六日夕方、先に入港した貨物船二隻が出発したが、二日目の朝、一隻だけ戻ってきたが、爆撃を受けたマストは折れ、船体も左へ傾斜し、ようやく辿り着いた感じ。甲板に集まった我々は、沈黙して船を迎えた。しかし、もう一隻はついに戻ってこなかった。

私たちの前途は真っ暗であったが、一月十日夜、一

カ月ぶりに出港命令が出て、船はようやく動き始めた。四日目の夕方、船は仏印ツーラン港の沖合に止まった。突如「上陸準備」「前方に有力な機動部隊が行動中」とのことで、乗員はすべて陸路輸送に変更となる。この輸送指揮官の判断は正解であった。「第十五多聞丸」は、その後シンガポールに向かい、二日目に潜水艦の雷撃で壮烈な最期を遂げたとのことである。

我々は暗くなった海上で、完全軍装のまま縄梯子を伝って焼津の徴用漁船に移り、久しぶりに大地を踏んだ。滞在二週間後、列車でサイゴンへ向かい、二月一日着であった。二月四日メコン河を遡りプノンペンに向かい、数度の空襲を受けながらバンコク着。タイの青年は「日本に電気はあるか」「電車はあるか」と我慢気に話をしていた。兵舎はニッパハウスであるが、近くにはインド独立義勇軍の宿舎もあり、ビルマ戦線から帰った古兵隊の宿舎もあった。

ここで、下士官に引率された十数名のグループに会ったが、全員真新しい軍服姿の傷病兵である。「どこへ行くのですか」との問いに対し、「バンコク陸軍病院

を退院し原隊に復帰します」「船がなく内地へは帰れない。戦友が待っていますから」。片手のない兵は残った手で銃を担い、片足のない兵は松葉杖をついてでも銃を背負い、片目の人は黒い眼鏡をかけて、ゆっくり歩く。「銃が撃てるのですか」の問いには、「ハイ、片目、片腕があれば大丈夫です」と、彼らの原隊は今、ビルマで激しい戦いをしている。「残った力を戦友と共に」「何とか皆の役に立ちたい」「死ぬ時は戦友と一緒に」熱い息吹が私たちの胸にグサッと強烈に刺さった。

一週間滞在し、マレー半島のクアラルンプールに着いた。我々の目的地は「南方軍教育隊」であった。ここまで長い旅路である。仙台から半年もかかってようやくの到着である。待機していた教官たちにより、手早く現地教育プログラムが開始された。私は大隊砲第四区隊、区隊長は森中尉である。早速、陣地構築教育で、蜂の巣陣地、夕弾による戦車攻撃陣地、……近くに迫った英米連合軍の再上陸攻勢に対応しての実戦用陣地である。このとき、候補生は、一通路を二十人く

らいで担当。二十人を二班に分け、一日を三等分して行う。つまり、十人が八時間労働で交代勤務である。

八時間、ツルハシで掘鑿し、土をモッコでかついで壕外へ搬出する。次の八時間は交代休憩、次の八時間は掘鑿という昼夜兼行で構築であった。

次に密林教育である。馬は使えぬので磁石頼りの人力で砲の分解搬送、道路開設、泥沼の渡渉、大木を登り作戦遂行。蟻との戦い。マラリア蚊対策、海洋訓練は陸逆上陸作戦を想定しての「大発艇」による上陸演習。暁の海水につきり、銃を濡らさぬ努力をしながら上陸し、直ちに戦闘。

南方教育隊卒業後、陸軍軍曹に進級、将校勤務の見習士官に任せられ赴任先が決定した。私は「第七方面軍野戦自動車廠」へ、任地はシンガポールである。時既に南方各戦線では日本軍の敗色濃く、米英軍の反撃が熾烈になっていた。仏印、タイ、ビルマ、各地の第一線部隊へ配属が決定された同期生が、羨ましがって区隊長に質問すると「酒井は自動車運転士だから」と答えておられた。私は入営直前の免許証がここで役立

つとは、夢にも思っていないかった。仙台から派遣された同期生とも別れ、それぞれの運命を辿ることとなった。

自動車廠へ配属されたのは十五名、青木准尉がシンガポール駅まで出迎え、ブキテマの本部へ案内してくれた。フォード工場が連隊本部であり、連隊長は片岡大佐。原隊は名古屋の輜重隊である。私は赴任の翌日、マラリアで発熱、四日熱ということで、発熱と悪寒が続いた。加畑軍医は一カ月ほどの入院加療をしなければ治らぬと言われ、ついに陸軍病院へ送られた。入院中に、私の配属は小銃隊出身の菅野と一緒に輸送中隊と決まった。一カ月ほど過ぎたある日、見舞いに来た菅野は特殊任務により他部隊転属となると知らされ、佐藤准尉は「中隊の戦闘態勢を確立する要あり」と、暗に私の退院を迫った。私は即日軍医に申し出て退院許可を求め、二日後に退院した。

部隊は三個大隊編成で、輸送中隊は第八中隊で第三大隊に属し、自動車廠の受け持つ防衛地帯の一部を担当した。

昭和二十年八月十五日は部隊の総合演習日である。

軍装を整え広場に整列した私たちは、中隊長の指揮下に入り、トラックに分乗してジュロン演習場に向かう。

本日は、タコ壺掘り。破甲爆雷による対戦車攻撃が行われる予定があったが、現地到着後様子が変わった。

「帰隊してラジオを聞くように」との指示があり、「正午から重大な放送がある」とも付け加えられた。噂が先行して「日本軍の無条件降伏」との話が飛び交い、ラジオは雑音ばかりで何も分からない。

連隊本部からは日本軍降伏を正式に伝えてきた。青天の霹靂とはこのことである。私はその日、週番士官に上番し、日夕点呼のとき「日本軍人として恥じぬよう、命令を遵守して行動する」と全員に通達した。中隊長は連隊本部から召集があった。夜まで帰れなかった。夜半、不寝番が緊張し「電話の交信が聞こえます。各中隊非常呼集です」「出撃準備です」私は驚いて「輸送中隊への命令が入ったか」「入っていません」「とにかく、中隊長殿が戻られてから指令を受ける。

それまでは何もしなくてよい」と不寝番に命じた。しかし、私は密かに身支度を整え、中隊事務室に向かい、中隊長の帰隊を待つことにした。

中隊長は明け方帰隊したが、興奮していて様子を話してくれない。後で聞く話では、一部の将校の間で停戦を潔しとせず、断固抗戦すべく十数台のトラックへ資料を積み込み、兵を動員して出撃準備をしたとのことである。しかし、宮門は閉ざされ、出撃は阻止され、この時の責任将校竹林地少佐は、翌日自決された。

安東中隊長は熟慮し、起床一時間前、輸送中隊全員の非常呼集を行い、重大事態の説明と訓示を行うことを週番士官の私に命ぜられた。私は週番下士官に、下士官は不寝番へと伝達され「非常呼集」と不寝番は叫び回った。全員鉄兜を背に、雑囊、帯剣、巻脚絆、銃を持って事務所前に整列した。これが、軍隊最後の非常呼集である。

私は軍装検査を行い、軍刀を抜いて中隊長に敬礼、全員集合を報告した。中隊長は大命を奉じ、日本の降伏を伝えた後、「これから敗戦処理を行う。付和雷同

せず、日本へ帰るまで命令に従って行動して欲しい。緊張して上擦った声だったが、諄々とした長い訓示で夜が明けた。

片岡部隊長、津田少佐ら幹部が直々中隊に出向き全員に訓示を行った。全員仕事が手につかず、ポツカリと大空に穴が開いたような、気の張りが抜けた思いであった。私は、涙が自然に頬を伝わるのを何度も手で拭いた。長い緊張の一日であった。

この日から、今まで受けた教育と一切無関係の敗戦処理という考えてもみなかった二カ年間という軍務が始まったのである。

次の日からシンガポール攻略時の英霊の墓標撤去、ブキテマは当時の激戦地で数多くの墓標が点在していたが全員で撤去作業である。次の日は、英軍へ引き渡す当部隊所有の自動車、全部輸送中隊への集結の命令が出て、この係が私に任命された。中隊の広場はたちまち満車となり、並び切れぬ車は通路上へ並べた。三日目朝、路上の自動車は現地人に盗まれ大部分なくなった。ブキテマ貨物廠倉庫も襲われ、延々何百メー

トルも道路上に現地人の行列が続き、肩に一袋ずつ食料を担ぎ小走りに走っている。ブキテマ駅ホームに山積みされた移動部隊の荷物がすべて盗まれ、監視兵は何とも手につけられない。

その翌日から昭南神社も解体焼却し、ブキテマ丘の忠霊塔も倒してしまった。騒然とした中で私は少尉に任官し、予備役に編入となった。市街では上陸した連合軍人が、日本人乗用者にピストルを突き付けて略奪するなど島内は物騒となってきた。住民は日本の軍票（紙幣）を居住区内にバラ撒き、日本軍の威信は住民に及ばなくなった。連合軍命により、シンガポール島を明け渡す日となり、私は全員を連れて食料をトラックに積み込み、マレー半島へ移動をした。ジョホール水道は臨時憲兵がいて武器を徴集しており、我々も軍刀のほかすべて丸腰になった。

最後の集結地は、ブキットベヌットのゴム林だった。片岡部隊長は、軍人勅諭の五箇条の代わりに「闘苦は大事業なり」と唱和させ、一・忠節の本分、一・敬礼の本分、一・勤労の勇氣、一・信義の道、一・苦難に

耐える力、の五箇条を教え、平和と復興の精神を培った。

ようやくレンパン島行きの順番が回ってきて、部隊は未明に出発し検問を受けた。しかし、全員が検問を終了してみると、結果は黒で、八百余名の隊員はブラックキャンプへ収容となった。この部隊は戦争犯罪容疑ありということである。一個の天幕に二十人くらい押し込まれ、携帯天幕を地上に敷き寝返りもできない。飛行場の中央地域であり、バリケードの中故、第一に排泄物の処理に困った。便所を作ってもすぐいっぱいになる。次々と掘らねばならなかった。スコールの折は特にひどい。天幕中に水が進入し、病人が出始めた。英軍に交渉し、ようやく敷き板の配給あり、湿気だけは防げる状態になった。

昭和二十一年一月二十日、行き先を告げられずに出発することとなった。幌を被ったトラックが二十数台並んでシンガポールに向かった。レンパン島に行くのかなとかすかな希望を持っていたが、ジョホールを渡り到着したのはチャンギー刑務所だった。到着順に一

人ずつ重い門を潜って中に入る。私は中隊のトップで中に入り込んだ。Bセクション二七号室。独房へ三人ずつである。室内はコンクリート製である。毛布一枚貸与された。

当日は夕食はなく、翌朝、空腹のため早く目が覚めて朝食を待った。九時になり笛の合図で廊下へ出、笛の合図で食堂に入る。笛の合図で食事、食事はビスケット三枚とスープのみ。昼抜きで二食だと言われた。運動場はBセクション収容者全員が集まり、私は体操指導を津田少佐から命ぜられた。容疑が晴れて三月末に刑務所を出るまで毎日体操の号令をかける羽目になった。腹が空いて声も出ないので、水腹も一度とやら、私は水をガブガブ飲んで力をつけた。

この指導中、「体を前に支え」をやらされ、「肘を曲げ」をダウンするまでやったり、便器の中に古いカミソリを入れられて、わざと便が流れなくする。それを手掴みで掃除させられた挙げ句、出てきたカミソリを突き付けられ不法所持だと、体罰を加えられたり、戦兢兢の毎日だった。



体操が終わると、素手で運動場の凸凹を整備させられる。スコールが通ると、もとの凸凹になってしまふ。それでも毎日同じことを繰り返して、掌で土を運ぶ。一カ月くらいして元気がなくなり、前途を悲観した首吊り自殺者が出た。そのため収容者全員の紐は全部取り上げられ、ズボンのバンド、防止のアゴ紐、水筒の紐、手拭いの類まで取り上げられた。

最も困惑したのは、刑務所へ入所した我々の写真と氏名を市内へ貼り出し、「この顔の者に被害を受けた者は申し出ろ」「届けた者には賞金をやる」と連合側は嫌がらせをやった。訴えた人の前を硝子越しに歩いて首実験をさせる。

刑務所の中には法廷も処刑所もある。入所中に何人かが絞首刑になった。受刑者は前日、日本人僧侶から訓話を聞き、その晩は希望する食事をいただき、最後の晩餐であり、故郷を偲んで歌った歌は、古賀政男「影を慕いて」が一番多かったと聞いた。歌声は、厚い壁にはね返り、その思いは故郷で帰還を待つ父母に別れを打ち明けたことであろう。その夜は泣いて、泣

いて、翌日は従容として刑場へ向かうのである。

執行は刑場で十三階段を上って行く。真っ白いシーツを頭から被せられ、首にロープを巻き、十三段目の踏板を外され吊り下げられる。刑の執行は一分間と聞いているが、全員ショック死で蘇生する者はいないという。後日その現場写真を見せられて、私はゾッと寒気がした。英国軍は、報復的に一部の写真を雑誌に掲載などして発表したのである。

東本願寺の僧が刑務所を訪れる回数が、次第に多くなってきた。当時死刑になったのは、連合軍捕虜に対して直接危害を加えたとされる兵士が多かった。恐らく彼らは命令を受け、任務遂行過程での行為であったと思われる。当時の日本軍人は上官の命に対しては逆らえず実行しなければならなかった。また、雑誌写真の中には、両手で檻につかまり、禪一本で骨と皮の老将の姿もあった。洗濯板のような胸と、悟りきった禅僧のような顔が思い出され、戦争敗戦国の哀れさがつくづく感じられた。私は「こんな所で死んでたまるか」と思った。

考えて見ると、入所以来、青い野菜は一度も食べたことはなく、日本軍の馬糧の乾燥玉蜀黍がポイルされて食事に出たことはあったが、それ以来オートミールかビスケット二、三枚が一食の量である。アメリカ軍の携帯口糧パシックレーションが支給されたときは、もっとひどかった。一食分の缶詰を三人で分けて食べるという。小さなビスケット四枚、チョコレート一個、チューインガム二枚、これを三等分するの、皆、目を皿のようにして分け前の公平さを見張ったりしたものである。

毎日口へ入れる物が少ないので、生水ばかり飲んでた。いくら水を飲んでも所詮はすぐ腹が空き、足がふらつく。食事は全部吸収され、大便是ほとんど出ない。たまに出ても大豆大の真っ黒いのが一つ二つ出るだけであり、骨と皮だけの体型になった。そのとき、ようやく個人の取調べが始まり、私たちは無罪放免となったが、出所ときは、アルファベット順に一日百名ずつが釈放である。

私物の荷物はかなり盗まれ半分近くなったが、大事

に背負って刑務所の門を出た。ガンと重い音がして扉が閉められる。音は特別長い余韻を残して響き、ようやく扉の外の人間となった。迎えに来たトラックの日本人運転手からもらった煙草を吸いながら、今まで入っていた東洋一の刑務所をゆっくり見上げたが、三月二十日の外の空気は爽やかであった。

自動車の行く先は「リパペレー作業隊」で、島内最大の陸海軍人の収容の作業隊である。鉄条網が張り巡らされ、電灯はなく、灯油ランプの生活である。作業隊の中央にクリークがあり、満潮のときはゴミでいっぱいになり、引き潮となるとゴミはなく泥だらけの川となる。

我々は所持品検査後、本来の中隊編成に戻り、英軍管理下の労働作業に移る。これから長い、苦闘の大事業が始まった。作業は毎日続く。将校は直接労務に加わらなくてもいいことになっているが、我々新任少尉の連中は、皆、兵と一緒に汗を流して働いた。このときは、市役所の労務者のストライキがあり、ゴミの収集や糞尿収集がストップしたので、この汚物処理をし

ている市民が「パン」「タバコ」などを差し入れし処  
理を頼みに来たのである。お陰で、これにより体力を  
回復することができた。

その後の作業は「第一作業」と呼ばれる現場へ送り  
込まれた。鉄材の移動集積に鞭で追い回された。この  
現場は重量物専門で、それを担いで走らせるなど報復  
的作業であり、負傷者が続出し敗戦国の悲哀を感じた。  
その他の作業は、食料倉庫の荷物運搬、セメント倉庫、  
冷蔵庫の出入庫作業、市内の河川の川浚い、港湾の荷  
揚げ、英兵舎の営繕など、いずれも重労働で皆殺気立っ  
てきた。しかし、「事故を起こせば日本に帰れない」  
をモットーに頑張り続けた。

作業現場も、警備の印度兵は終戦後本国からシンガ  
ポールへ派遣された兵隊なので、警備もゆるやかにな  
り、自分たちの昼食を愛想よく差し入れてくれるよう  
になった。昭和二十二年の正月がやってきて、タピオ  
カの蒔と椰子のコブラを杵でついて正月の餅作りに揮  
一本で汗を流したことなど日本では想像もできなかつ  
た。

涙をのんで降伏してから二カ年、八月の終戦記念日  
が来たころ、ようやく復員の命令が出て、私は突然  
「設営隊長として先発を命ず」と本部命令を受けた。

トラックで着いた集結地ジュロンキャンプは、乗船部  
隊の待機所である。九月早々英国船「マルタ号」がシ  
ンガポールに入港、乗船命令が出た。明朝五時、キャ  
ンプ地にトラックがずらりと並んでいる。リュックサッ  
クを背負い乗車完了すると、現地人が「マスタ、東  
京バレ（帰る）か」「イギリス、タボレ（駄目だ）」  
「ニホン、バニャバグス（大変良い）」「ラツカム（早  
く帰ってきて下さい）シンガポール」。私たちは手を  
振るだけであった。

広島へ入港したのは昭和二十二年十月初旬であり、  
私の軍隊生活もようやく終了し、第七方面軍野戦自動  
車廠も幕を閉じた。死を覚悟した戦闘要員から、終戦  
処理要員となった私は、当時の戦友一人一人の顔をま  
だ鮮明に思い出す。激動の四年間は多彩、多岐であっ  
た。しかし、有益な人生勉強であった。